

【概要書】

『源平盛衰記』における物語叙述の方法

井上 翠

本論では、以下のとおり、第一部において『源平盛衰記』がどのように論じられてきたかを概観し、第二部において『源平盛衰記』における物語叙述の方法と物語としての特質について論じ、第三部において『源平盛衰記』の教材としての可能性を考察した。

第一部 『源平盛衰記』研究史

戦前編

戦後編

第二部 『源平盛衰記』における物語叙述の方法

第一章 西光の機能

第二章 重複記事の分析

第三章 巴の物語

第四章 敦盛最期譚の可能性

第五章 小宰相の入水

第三部 『源平盛衰記』教材化論

第一章 「大場早馬」から「勾踐夫差」への展開

第二章 「橋合戦」から「季札劔」への展開

## 第一部 『源平盛衰記』 研究史

第一部では、明治時代以降、『源平盛衰記』がどのように論じられてきたかについて、戦前編と戦後編として、それぞれ成立論と作品論に大別して捉えた。『源平盛衰記』は、『平家物語』とともに、近世史書においては史料として用いられていたが、その史料的価値に疑問が呈され、明治時代の半ば頃から史料ではなく文学として扱われることとなった。

まず、戦前においては、『平家物語』との先後や『源平盛衰記』成立の背景が検討されるなかで、『平家物語』諸本の系統が考察され、『源平盛衰記』は延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』とともに論じられる一方、文学となった『平家物語』が叙事詩として評価を受けるのに比べて、『源平盛衰記』はその文学的価値が低いものとされる傾向にある。昭和十四年には第二次世界大戦が開始され、戦時下においては武士道精神が強調される。軍記物語はこれと結びつけて論じられ、『源平盛衰記』もまた、武士道の観点から評価されることとなる。一方で、諸本や諸記録の集大成で、知識的・術学的、あるいは注釈的・辞典的な性質や、殺伐・卑俗な面があるといった今日的な『源平盛衰記』評がすでに見受けられる。

戦後には、多彩な『平家物語』諸本の一つとして、また、そこから独立した一作品として、さらなる研究が進められる。『源平盛衰記』は、延慶本『平家物語』および長門本『平家物語』と併せて論じられることが多いが、本論では『源平盛衰記』を主とする論考を中心に引き上げた。戦後においては、『源平盛衰記』の成立時期や背景について、他作品との関係や、成立圏などから考察されるときにも、さまざまな資料を取り込んで『源平盛衰記』の出典に関する論考が多く見受けられる。また、『源平盛衰記』の異常・異様な世界への関心や饒舌さの所以、教訓的な性質などととも、『平家物語』とは異なるありようの解明が進められ、『平家物語』を読みかえ、異化し、異質の世界を提示する『源平盛衰記』の特質が論じられている。

このように文学となった後も『源平盛衰記』の研究は深められてきたが、『源平盛衰記』は知識豊富ではあるものの繁雑・冗長であり、整合性や求心性を欠くといった評言が散見され、また、他の諸本にはない多くの叙述を有する『源平盛衰記』は、故事説話など所謂傍系の叙述に注目してその成立や特徴が論じられることも多い。しかし、多くの資料を取り込みながら、『源平盛衰記』は平家一門の栄枯盛衰や源平の争乱およびそれに関連した出来事をどのように描き出しているかということこそ最も考察されなければいけない課題ではないか。このような問題意識から、第二部では、『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特質を考察した。

## 第二部 『源平盛衰記』における物語叙述の方法

### 第一章 西光の機能

第二部第一章では、『源平盛衰記』において他本とは異なる位置づけとなっている清水寺炎上や殿下乗合さらには治承三年政変といった出来事について、西光に着目して読み解いた。『源平盛衰記』では、平清盛と西光の対決において、「過分」であるのは清盛の方ではないかという西光の反問から、西光に対する批判は反転して清盛にも向けられるとともに、清水寺炎上や殿下乗合などの他本とは異なる位置づけにつながってゆく。さらに、後白河院に讒言する西光と後白河院に諫言する静憲は、いずれも清盛と対峙する人物として対照性が見出され、これまでの出来事が結びつく形で治承三年政変が描かれている。また、『源平盛衰記』では、『愚管抄』や『玉葉』など史実に近い描写が用いられているが、単に史実に合わせた記事となっただけでなく、そこから殿下乗合や治承三年政変の他本とは異なる展開が生まれている。その点において、史料の取り込みもまた『源平盛衰記』の物語叙述の方法の一つと言える。

### 第二章 重複記事の分析

第二部第二章では、『源平盛衰記』における行綱の密告、大場景親の早馬、一の谷の城戸口へ向かう平山季重の動向に見られる叙述の繰り返しに着目し、『源平盛衰記』の物語叙述の方法を考察した。『平家物語』諸本に共通して、鹿ヶ谷謀議における酒宴の様子は詳細に描かれているが、『源平盛衰記』では、行綱の密告においても酒宴の様子が具体的に述べられている。また、大場早馬は『源平盛衰記』における重複記事として古くから指摘されている。さらに、『平家物語』諸本に共通して、一の谷の城戸口に至るまでの経緯を季重が語るが、『源平盛衰記』では、それに先立って季重の動向が具体的に描かれ、同内容が繰り返されている。これらの叙述の繰り返しは、一見、『源平盛衰記』の冗長さを示すものとも捉えられるが、独自の趣向が施されることによつて物語世界を増幅させている。さまざまな資料の取り込みがいわば『源平盛衰記』外側からの増補であるのに対して、叙述の繰り返しは『源平盛衰記』内側からの増補と言える。

### 第三章 巴の物語

第二部第三章では、「木曾最期」における巴の物語の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質の解明を試みた。『源平盛衰記』では、巴が木曾義仲の「乳母子」で「妾」とされている。巴は「木曾殿の乳母子」と名乗って見事な戦いをしてみせるが、巴に討たれた敵の首を見た義仲は、「女」として巴に離脱を命じる。巴は「乳母子」として義仲と「一所の死」を望むが、それはかなわず、義仲は乳母子である今井兼平と「一所の死」を望む。『源平盛衰記』の巴の物語は、覚一本『平家物語』を中心とした「木曾最期」を相対化するものとなっており、また、故事説話や異説が外部から物語を相対化するのに対して、「木曾殿の乳母子」と名乗る巴は物語を内部から相対化するものと言える。

#### 第四章 敦盛最期譚の可能性

第二部第四章では、敦盛最期譚の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質のさらなる解明を目指した。『平家物語』には「父子の物語」という一面があり、敦盛最期譚はいわばその変奏として、擬似的な「父子の物語」に数えられる。だが『源平盛衰記』では、「誰の子か」という問いと「存ズル肯」の解釈のズレから、父の位置から平敦盛を見る熊谷直実とその直実に武者として対峙する敦盛の隔たりが浮き彫りになる。それは「心通い合う二人」という読みを相対化するものとしても機能する。さらに、『源平盛衰記』では、敦盛最期譚の直後に描かれる敦盛の兄・平経正の最期が敦盛最期譚そのものを相対化するものとなっている。直実とすれ違う敦盛は「父子の物語」を相対化し、経正の物語は敦盛の物語そのものを相対化する。『源平盛衰記』は、ときに『平家物語』諸本の「物語」の枠組みをはみ出し、それを相対化する新たな「物語」を生み出している。

#### 第五章 小宰相の入水

第二部第五章では、『源平盛衰記』における小宰相の入水の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質のさらなる解明を目指した。『源平盛衰記』では、平通盛を慕い入水へと向かう小宰相を、乳母子の女房は同じ思いで引き戻そうとする。しかし、そのような乳母子の女房の言葉に小宰相は応じない。そして小宰相は、自身が送った歌にたがわず二度と「カレクニ」なることのなかった通盛にどこまでも後れまいと入水する。互いの言葉が通い合う通盛と小宰相に対し、乳母子の女房は通い合うことなくひとり残される。人物間のやりとりにおける齟齬は、義仲と巴、直実と敦盛の間にも見られたものであり、その不調和から新たな物語が生まれてゆく点に、『源平盛衰記』の物語としての特質の一端が捉えられる。

第二部では、平家一門の栄枯盛衰や源平の争乱およびそれに関連した出来事を対象として『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特質を考察したが、第三部では、所謂傍系の叙述を活用することによって『源平盛衰記』の教材としての可能性を考察した。さまざまな資料を取り込んでいる『源平盛衰記』は、他の諸本にはない多くの故事説話を有しており、四十八巻に及ぶ膨大な叙述の一因となっている。それをを用いることによって古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく。

## 第三部 『源平盛衰記』教材化論

### 第一章 「大場早馬」から「勾踐夫差」への展開

第三部第一章では、『源平盛衰記』における会稽山の話説話をを用いて古文・漢文複合教材の可能性を考察した。『源平盛衰記』では、「大場早馬」の後に会稽山の話説話「勾踐夫差」が見られ、巻第二「額打論」とその報復としての「山僧焼清水寺」の後にも会稽山の話説話「會稽山」が見られる。それらの場面を取り上げ、また、比較することによって、学習者は『源平盛衰記』という一作品のなかで故事説話がどのように用いられているかを考えることができる。そしてこの会稽山の話説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「臥薪嘗胆」と密接な関連があり、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくことができる。古文の授業のなかで『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」から「勾踐夫差」、巻第一「額打論」「山僧焼清水寺」から「會稽山」を先に学習している場合には、その中国故事説話を漢文の授業のなかで捉えることができ、漢文の授業のなかで「臥薪嘗胆」を先に学習している場合には、その中国故事説話が『源平盛衰記』にどのように取り入れられているかを古文の授業のなかで捉えることができる。さらに、「大場早馬」から国語教科書に漢文の教材として掲載されている「荊軻伝」へと展開することもできることを論じた。

### 第二章 「橋合戦」から「季札劔」への展開

第三部第二章では、国語教科書に古文の教材として掲載されることのある『平家物語』『橋合戦』から『源平盛衰記』に見られる中国故事説話「季札劔」を用いて漢文の授業へとつなげてゆく国語の授業の展開について考察した。授業の実践を考慮した場合、まず、教科書に掲載されている「橋合戦」を扱い、その発展として、『源平盛衰記』巻第十五「宮中流矢」を取り上げ、「季札劔」へと展開する方法が有用であろう。国語教科書に掲載されている「橋合戦」の冒頭は、「宮は宇治と寺との間に、六度まで御落馬ありけり」とされており、『源平盛衰記』巻第十五「宮中流矢」は、その以仁王の最期の場面から始まる。そして『源平盛衰記』では、「宮中流矢」の後に「季札劔」が見られ、この故事説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「季札挂劔」と密接な関連があり、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくことができる。実践に際して、授業時間数などを考慮した場合にも、一つの学年における古文の授業と漢文の授業を連動させた国語の授業を展開することが可能であろう。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）の第2章第1節国語において、第2款各科目の第2言語文化の2内容（2）アには、「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。」とあり、また、古典の教材として国語教科書に掲載されることの多い『平家物語』の異本の一つである『源平盛衰記』という一作品のなかで中国故事説話を捉えることによつて、国語の授業において古文とともに漢文を学習する意義について学習者の理解を深めることにも役立つであろう。

『源平盛衰記』は、さまざまな資料を取り込み、また、芸能との関係も指摘されるなど、相互

に影響し合い、多彩な回路を持つものとなっている。その特長を用いることによって、古文の授業から多岐にわたって展開することができる教材として、『源平盛衰記』の可能性の一つがあると言える。